

伊藤嘉夫編
久曾神昇

西行全集

第一卷
歌集叢刊

ひ
た
く
書
房

昭和 56 年 2 月 10 日 印刷
昭和 56 年 2 月 16 日 発行

西行全集 全二卷

◎ 揃定価 一五、〇〇〇円

編者 伊藤 嘉夫
久曾 神昇

発行者 井上 了貞

印刷者 田中 忠男

発行所

ひたく書房

〒144 東京都大田区南蒲田二一八一五
電話〇三―七三八―一五九三番
振替東京〇―八七三四七番

序

昭和十五年は、わが國としては皇紀二千六百年祝典が盛大に催された年であり、國文學界にあつては、文治六年二月十六日に示寂した歌人西行の七百五十年遠忌が、弘川寺でしめやかに営まれた年であつた。その記念事業の一端として、故佐佐木信綱博士の發意により同博士、故川田順氏と共に西行全集を編纂することとなり、それぞれ分坦執筆し、翌年二月刊行したが、顧みるとすでに四十年の歲月が経過した。

西行に關する調査研究は、それ以前においても盛んであつたが、それ以後においても隆盛で、好著が相ついで公刊せられてゐる。西行全集は、最初より發行部數が少なかつた上に、利用者が比較的多く、早くより不足をつけ、再刊が要望せられてゐたが、倉卒の間に調査し得た程度にすぎず、意に滿たぬ部分が極めて多いので、一應の參考資料とするにとどめ、其後の精査研究の成果を鶴首してゐたのであるが、今日に至るまで、その不備を補訂すべき好著の公刊を見ず、依然使用せられてをり、必要性の多い新進學徒にはいよいよ入手困難な狀況となつたので、その要望に應へることになつた。

近年四十年間に、西行の研究は著しく進んでゐるので、故人となられた佐佐木博士及び川田氏の御研究を、改訂することなく當時のまま再刊することは、御意思に戻る虞れもあるので、敢へて割愛することとした。私ども擔當の資料の部にあつても、別本山家集の出現をはじめ、西行書狀の發見、完本山家心中集の出現などがあり、全面的に改稿する必要もあらうが、その暇もなく、殊に別本山家集の如きはすでに覆製本も刊行せられてゐるので、暫く原形を保持しつつ、山家心中集の改訂、西行書狀類の増補などの如く、改訂せざるを得ない部分のみ改稿するにとどめた。

和歌索引は分離別冊とした爲に、散佚してしまつたものが多く、殆んど利用されてゐない狀態であるので、このた

びはその點を考慮して付載することとした。

本書の刊行にあたつて、初版以來、宮内廳書陵部、京都大學附屬圖書館、國會圖書館、神宮文庫、石川縣立圖書館、多和文庫、近衛家、伊達家、津輕家を始め諸家諸文庫の御好意に對し、橋本進吉氏、武田祐吉氏、田中親美氏、橋井清五郎氏、鈴鹿三七氏、宮良當莊氏、松田武夫氏、筑土鈴寛氏、蘭田守孝氏、平井卓郎氏、市古貞次氏、林大氏、田中允氏等の諸氏に深甚なる謝意を表すると共に、再版に際しては特に、妙法院、永井義憲氏の盛意に厚く御禮申上げる次第である。なほ營利を度外視して刊行せられた「ひたく書房」並びに井上了貞氏の快學に對し、深甚の敬意を表する所以である。

昭和五十六年一月一日

伊藤 嘉夫
久曾 神昇

凡 例

一、本集は全二巻に分ち、第一巻に歌集叢刊を、第二巻に文獻叢刊を収める。

一、歌集叢刊を伊藤嘉夫、文獻叢刊を久曾神昇が擔當した。

一、歌集叢刊はこれを二部に分ち、第一部は纂校山家集、聞書集、同殘集、西行法師家集、西行法師和歌拾遺を收め、各歌に相互及び撰集其他の出典を註し、増補山家集抄の説等を適宜に脚註し、順次既出歌頭に○印を附した。

一、纂校山家集は、六家集本山家集の異なる三系統の本（近衛家本を底本にし、平井卓郎氏藏松屋本書入本と、流布板本）を合せて歌を増補し、これに溫故堂舊藏本、神宮文庫本等を校合した。即ち、*印は底本に無い歌、△は松屋本に無い歌、□は流布本に見えない歌である。この印が二つ重つた場合、例へば*△といふ時は、流布本にあつて、底本にも松屋本にも無い歌である。

一、聞書集は、原本なる、伊達家藏（重文）聞書集を翻刻せるもの。聞書殘集は、宮内廳の允許を得て、その二種二本を、一は寫眞版として上欄に、一は下欄に活字に翻刻した。この二本が現存の聞書殘集の全部である。

一、西行法師家集は、伊藤嘉夫藏本を底本とし、藤岡東園博士舊藏本、伊藤嘉夫藏天文七年書寫本及び板本を以て校合した。

一、西行法師和歌拾遺は、これを上、中、下の三巻に分ち、上巻に以上の諸書に見えなくて、兩宮歌合、撰集等に出来る西行の和歌を輯め、中巻は存疑西行和歌を、下巻は誤傳西行和歌を輯めた。

一、第二部は、兩宮歌合（これは當然第一部に入るべきものであるが、文獻叢刊に收められてゐる爲、ここには判詞

を省いたものを載せた・山家心中集・勅撰集所載西行和歌・私撰集所載西行和歌・六家抄中山家抄・七家集本山家集・歌枕もしほ草・追而加書西行上人和歌の九種の書を収めた。兩宮歌合は三種の伊藤嘉夫藏本で校訂し、山家心中集は、永井義憲大妻女子大學教授の御好意により紀要に發表された妙法院本を轉載、六家抄中山家抄は松田武夫氏藏本に宮内廳書陵部藏の二本を校合し、九六古新註の註を加えたもの、七家集本山家集は竹柏園藏本により、追而加書西行和歌は藤岡博士の舊藏本により、歌枕もしほ草は寶曆十一年刊本より翻刻した。勅撰集所載西行和歌及び私撰集所載和歌は伊藤嘉夫が編せるものである。

一、脚註及び校合の略符は次の如くである。

山	六家集本山家集	聞文ハキ	聞書集	殘	聞書殘集
西又ハサ	西行法師家集	御裳	御裳濯河歌合	宮河	宮河歌合
心	山家心中集	新古	新古今和歌集	新勅	新勅撰和歌集
續古	續古今和歌集	續拾	續拾遺和歌集	續千	續千載和歌集
續後拾	續後拾遺和歌集	新千	新千載和歌集	新後拾	新後拾遺和歌集
新續古	新續古今和歌集	續詞	續詞花和歌集	御裳集	御裳濯和歌集
フ	夫木和歌抄	拾風	拾遺風體和歌集	抄	增補山家集抄

(詞花和歌集を「詞花」と出せる如く、單に和歌集を略したる如きはここに掲げず。其他おほむねその例にならふ。猶、校本の略符は、その本の巻初脚註の初に出す)

一、文獻叢刊は、西行に關係深いものより順次收録した。即ち自歌合たる兩宮歌合、言談筆録たる西行上人談抄、假託書たる撰集抄二本、傳記小説たる西行物語六編、西行關係の謡曲十曲、お伽草子二編、圓位上人古墳記、遠忌文獻四編及び西行關係記事を百部より抄出した西行關係文獻抄である。

一、撰集抄廣略二本、西行物語六編の如く、甚しい相違のある傳本は、異本をも共に收録し、近似文獻は上下兩段に

配し、比較に便ならしめた。

一、文獻叢刊所收各文獻の底本、參照本は、各本文の奥に明記し、なほ目次追補、本文錯簡改訂などあるは、その旨を解題中に詳述した。特に記載なきは流布本によつた。

一、讀者の便を圖り、特殊の場合を除き、誤脱を訂補し、歴史假名遣に統一し、漢字假名は適宜に改め、異體字變態假名は通常文字流用假名に改め、清濁を分ち、句讀點を施し、必要に應じ章段を設けた。

一、文獻叢刊解題は、内容よりも書誌的解説を重視し、また兩宮歌合、西行上人談抄、撰集抄、西行物語など、西行に關係深い文獻を詳述し、その他は略述するに止めた。

西行全集 第一卷 目次

序

凡例

西行歌集叢刊

伊藤嘉夫編

第一部

纂校山家集	一
聞書集	一七
聞書殘集	一八五
西行法師家集	二〇一
西行法師和歌拾遺	二二七

第二部

御裳濯河歌合	二五五
宮河歌合	二七
山家心中集（妙法院本）（永井義憲註）	二九
勅撰集所載西行和歌	三〇六
私撰集所載西行和歌	三二八

六家抄中山家抄	三三
西行山家集（七家集本山家集）	三六
歌枕もしほ草	三八
追而加書西行上人和歌	三九
西行歌集叢刊解題	四〇
初句索引	四一
四句索引	四二
事項索引	四三

西行全集 第二卷 目次

西行文獻叢刊

久曾神昇編

御裳濯河歌合	一
宮河歌合	二七
詳註西行上人談抄	三五
撰集抄（略本）	三九
撰集抄（廣本）	四六
西行物語繪詞（傳土佐經隆筆）	四八

西行物語（文明十二年本）	二五上
西行一生涯草紙	二五下
西行物語繪詞（海田采女本）	三三
西行物語（木板本）	三二上
西行上人發心記	三二下
謠曲（西行關係）	三七
お伽草子	三五
圓位上人古墳記	四二
西行上人遠忌	四八
西行關係文獻抄	四七
西行文獻叢刊解題	四二
追補（西行關係文獻抄）	五三

卷頭圖版目次

第一卷

第一圖 陽明文庫本山家集
第二圖 李花亭文庫本西行上人集
第三圖 天文本山家集
第四圖 一品經和歌懷紙

第二卷

第一圖 傳西行筆月輪切（宮河歌合）
第二圖 西行假名書狀（甲）
第三圖 西行假名書狀（乙）
第四圖 平康賴書狀（西行宛）

西行歌集叢刊

伊藤嘉夫 編

校纂 山家集

春

たつはるのあしたよみける

一 △ としくれぬ春くべしとはおもひねにまさしく見えてかなふ初夢

二 △ 山のはのかすむけしきにしろきかなけさよりやさは春のあけほの

三 はるたつとおひもあへぬあさいでにいつしかかすむおとは山かな

四 たちかはる春をしれとも見せがほにとしをへだつる霞なりけり

五 *△とけ初むるはつ若水の氣色にて春立つことのくまれぬるかな

家々翫春と云事

六 門ごとにたつる小松にかざされてやどてふ宿に春はきにけり

春立心を人々五首よみけるに

七 *□音羽山いつしかみねのかすむかなまたる春は關こえにけり

山家集

* 底本ニナキ歌
マ 松屋本ニヨル校合
ル 流布本
イ 温古堂本
シ 神宮文庫本
フ 夫木抄
サ 西行法師家集
抄 堀河山家集抄

底本、山家集上。松屋本、山家集本上。流布本、山家和歌集上

(一) 夫木「家集立春頌をよめる」○抄に「ことしも暮れ終りぬ明けなば春の來るべしと時移るを感じ、思ひ難は夢に見ゆる暫にそのまゝみえ目覺われは春なり、これ正夢にてはかななりとなり」

(二) 音羽山は東都東山の中なる一峰

(四) 御笠十一番左・西・心「初春の朝に」○抄に「立ちへだつるものは露なれば、その露詞より云ひかけしなり」

(五) 夫木「家集春立ちける日」●流布本により補入

(六) ○抄に「この歌にかざすとあるは挿頭にはあらず、松飾といへばその詞の縁より題の散とあるをこめて春もかざしはきされて宿々に來けりとなり」

(七) ●松屋本によりて補入

八 *口春たつをあづまよりくる人さへにせきのしみづのおとにしろかな

九 *口春たちて昔羽のさとのかげの雪にしたの清水のとくるまちける

一〇 *口いつしかにおとはの瀧のうぐひすぞまづみやこにははつねなくべき

一一 *口春たちぬかすみがさねの衣きてうめがちらせうぐひすのこゑ

元日子日にて侍りけるに

一二 ねのひしてたてたる松にうゑを^{ちマ}へむちよかさぬべきとしのしるしに

山ざとに春立つと云事

一三 山ざとはかすみわたれるけしきにて空にやはるの立つを知るらむ

なにはわたりにとしこしに侍りけるに、春立つところをよみ

ける

一四 いつしかとはるき^{もシ}にけりと津の^{なマ}くにの難波のうらを霞こめたり

春になりけるかたがへに、しがのさとへまかりける人にぐ

してまかりけるに、あふさか山のかすみけるをみて

一五 わきてけふあふさか山のかすめるはたちおくれたるはるやこゆらむ

はるきて猶雪

一六 *△かすめども春をばよその空にみてとけんともなき雪の下水

だいしらす

一七 はるしれと谷の^{下ル}ほそみづもりぞく^{ゆくけこ}るいはまの氷ひまたえにけり

(八)●松屋本にて補入

(九)●松屋本にて補入

(一〇)●松屋本にて補入

(一一)●松屋本にて補入

(一二)●抄に「朔より六日までの間に子あれば

月中に子日三つ有りて、上を初子の日と云ひ、

次に中の子後の子と祝ふ也、三度共に野邊に出

て小松をひき庭に移し植ゑなどする也。後の子

は土佐日記に見えたり。子は十二支の初め也。

元日は三の始也。元三の上に種子に驚りたれば

格別のしるし門松に子日の松を植ゑそへむとの

心なり」

(一三)●抄に「そらに知るとは、かすむ空を開

によせたり。み山なりとも霞むにて闇推するや

らむと思ひはかりしなり。上の山里の歌(二)に

同じ心なれど上は自也。是は他也。山里にては

霞わけしきに春ぞと知るらむと他を厭る也」

(一四)●抄に「一首すこしも曲節をいれず、こ

れ無心體自然のままをよめるが、いつしかると

上に置き、霞こめたりまでかかれり。又應玄上

品の體なるべし」

(一五)宮河二番右〇かたがへは、外出せむと

して其の方角の方案の時、前後に他に宿り、方

向をかへておもむくこと

(一六)西「初春」心「春きたりて猶雪さゆ」●この

歌流布本にあり

(一七)西「初春」西一本に「山水春を告ぐるとに

いふことを善徳院前寮宮にて人々よみ侍りし」とあり。心にも〇善徳院は仁和寺の善徳院。前

寮宮は上西門院の御事。新宮は善徳院の殿なり

一八 かすまずはなにをか春とおもはましまだゆききえぬみよしの山
海邊霞と云事を

一九 もしほやくうらのあたりは立ちのかでけぶりたちそふはるがすみかな
同じ心を、伊勢にふたみと云所にて

二〇 浪こそとふたみのまつの見えつるはこそゑにかかる霞なりけり

子日

二一 はるごとくにのべの小松をひく人はいくらのちよをふべきなるらむ

二三 子日する人にかすみはさきだちてこまつがはらをたなびきてけり

二三 △ ねのひしにかすみたなびくのべに出でてはつ鶯のこゑをききつる

わかなにはつねのあひたりければ、人のもとへ申しつかはし
ける

二四 わかなつむけふにはつねのあひぬればまつにや人のこころひくらむ

雪中若菜

二五 けふはただおもひもよらでかへりなむゆきつむのべのわかななりけり

二六 *口野べごとに雪をかしらにいただきてわかなを人のつむにざりける

わかな

二七 かすがのはとしのうちははゆきつみてはるはわかなのおふるなりけり

雨中若菜

(一八) 續後撰「春の歌の中に」

(二〇) 心「海邊霞と申す事を、伊勢にて神主どもよみ侍りしに」西「海邊霞(社頭霞)と申す事を伊勢にて詠み侍りしに」夫木二「伊勢の二見の浦にて海邊の霞を」

(二二) 西「子日」心「子日」

(二三) 〇抄に「松をひくとの詞の終より鶯の園引くに云ひなして、人ひかぬ先に、かすみの引くと也。先だつゝも露立つによせたり」

(二四) 西「若菜に初子の日あひたりしに人の許へ遣し侍りし」心「わか菜に初子のあひぬれば人の許へ遣しはべりし」〇若菜は、往時正月上の子の日に禁中にて内膳司より其年の七種の新菜を羹として奉りしもの。後、正月七日の食供として奉るものとなり。この歌、人日の今日に子日の合ひたりと也

(二五) 西雪中若菜「續拾二」題しらず「心」雪の中的わか菜」

(二六) ●松屋木にて補入

(二七) 〇春日野は、古今集卷一に、「春日野の飛火の野分出でて見よいま幾日ありて若菜つみてむ」とある如く、古來若菜をつみし所なり

二八 春雨のふるののわかなおひぬらしぬれぬれつまむかたみたぬきれ

わかなによせてふるきをおもふと云事を

二九 わかなつむのべのかすみぞあはれなるむかしをとほくへだつとおもへば

老人のわかなと云事を

三〇 うづえつきななくさにこそおひにけれとしをかさねてつめるわかなは

寄若菜述懐と云事を

三一 わかなおふるはるののみに我なりてうき世を人につみしらせばや

寄鶯述懐

三二 うき身にてきくもをしきはうぐひすの霞にむせぶあけほの山

閑中鶯

三三 鶯のこゑぞかすみにもれてくる人めともしき春の山ざと

雨中鶯

三四 鶯のはるさめざめとなきゐたるたけのしづくやなみだなるらむ

すみけるたにに、うぐひすのこゑせずなりければ

三五 ふるすうとくたにの鶯なりはてば我やかはりてなかつとすらむ

三六 鶯はたにのふるすを出ぬともわがゆくへをばわすれざらなむ

三七 うぐひすは我をすもりにたのみてやたにのをかへはいでてなくらむ

鶯の歌二首よみける、當座

二八西「雨中若菜」心「雨の中のわかな」○春雨の降る野に布留野をよす。布留は大和石上

二九御發集春上「若菜をよめる」宮河三番左

三〇抄に「卯枝は正月初卯日に梅梢竹などに、五色の糸して巻きたる枝なり。老人年を積りけるを染つるによせし也。かく枝に助けらるる身に七草に掛けりと自ら老を感ずるなるべし」

三一西「寄若菜述懐」心「若菜によせて思ふのべ待りしを」宮河三番右○つみしらせばやは彌みに罪をかけたるなり

三二抄に「上旬に述懐あり。うき身ならでこそ思へば猶聞き惜しみのせらるると也。うき身ならずばいかばかりと寛玩するなり。鶯の背はあびやかに誰ふ鶯の息にむせびたるやうに弱々しければ曙の霞にむせぶとよめる也」

三三西「鶯」抄に「人目ともしきは閑也。かく閑なる上に鶯の立ちこめたれど、音のみりくるがえならぬなり」

三四抄に「古今集の體有。春雨よりさめんと云ひかけて鳴くも云ふより涙を思ふ也。ゐたるは竹にあてある也」

三五西「すみなれし谷に鶯の聲せずなり侍りしかば何となくあはれたに」心「住みなれし谷に鶯の聲せずなりしかば何となく哀なるやう覺えて」御發集春上「題不知」宮河四番左

三七「天木」二家集鶯を」

三八 *口うぐひすはふるすにこもるこゑのうちに春をばもちてつぐるなりけり

三九 はるのほどはわがすむいほのともになりてふるすないでそ谷の鶯

きぎすを

四〇 もえいつるわかなあさるときこゆなりきぎすなくの春の明ほの

四一 おひかはるはるのわかくさまちわびてはらのかれのにきぎすなくなり

四二 春の霞いへたちいでてゆきにけんきぎすたつ野をやきてけるかな

四三 かた岡にしばうつりしてなくきぎすたつはおととてたかからぬかは

梅を

四四 *△香にぞまづ心しめおく梅のはな色はあだにもちりぬべければ

山家梅

四五 かをとめむ人にこそまて山ざとの垣ねに梅のちらぬかぎりは

四六 △心せむしづがかきねの梅はあやなよしなくすぐる人とどめけり

四七 △このはるはしづが垣ねにふれわびてうめがかとめむ人したしまむ

嵯峨にすみけるに、みちをへだてて坊の侍りけるより、梅の

風にちりけるを

四八 ぬしいかに風わたるとていとふらむよそにうれしき梅のにほひを

いほりのまへなりける梅をみてよみける

四九 梅が香をたてふところにふきためていりこむ人にしめよ春風

(三八)〇この詞書松屋本にて補入。即ち底本流布本とも(三五)(三六)(三七)(三九)は同時の作の如く見え、抄に「題四首」とも色々情を轉じて妙也」といひ、尾山氏もこの四首連作の體なりと注意せられたり。されどこの詞書によれば(三八)(三九)は別作なり。(三八) ●松屋本によりて補入

(四〇)西「雉子を、夫木一」「家集、雉子を」〇抄に「曙の枕に聞きしさま也」

(四一)西「雉子を、夫木五」「家集春歌中」心「きぎすを」

●「春麗」片岡の歌、板本前後して出せり(松屋本もこの順序なり)

(四三) 夫木五「家集春歌中」〇しばうつり、抄に「雉子のかなたこなたと顔に移るものなり、顔に鳴くをしば鳴くといふ也」

(四四) ●板本より補入

(四五)〇抄に「とめむは求めむ也。花不散聞は香を求めむ人をこそまてといふ。香をとめむはやさしき人としるる也。限とはことごとく散り果つるまで也。これにて咲き初めしより久しく待たれしこも籠りて聞ゆ」

(四七)夫木三十六「梅歌中」

(四八)曇葉一・西「嵯峨に住み侍りしに、道をへだてて隣の梅のちりこしを」心「嵯峨に侍りしに道をへだてて坊の侍りしより梅の風にちりこしを」〇抄に「散りくる故此方には匂ふが通しきを、彼方梅主はいかばかり散らせる風をいとふならむと也。吹くといへば一字足らぬをわたりといて證かに妙也」

(四九)夫木三「家集中」

伊勢にもりやまと申す所に侍りけるに、いほりにうめのかう

ばしくにほひけるを

五〇

しばのいほにとくとうめのにほひきてやさしかたもあるすまひかな

梅に驚なきけるを

五一

うめがかにたぐへてきけばうぐひすのこゑなつかしき春の山ざと

五二

つくりおきしこげのふすまに驚は身にしむ梅のかやにほふらむ

たびのとまりのうめ

五三

ひとりぬるくさのまぐらのうつりが垣ねのうめのにほひなりけり

古砌梅

五四

なにとなくのきなつかしきうめゆゑにすみけむ人の心をぞしる

山家春雨と云事を、

大原にてよみけるに

五五

はるさめののきたれこむるつれづれにひとにしられぬひとのすみかか

霞中歸鴈

五六

なにとなくおほつかなきはあまのはらかすみにきえてかへるかりがね

五七

かりがねはかへるみちにやまよふらむこしのなかやま霞へだてて

歸鴈

五八

たまづさのはしがきかとも見ゆるかなとびおくれつつかへるかりがね

山家喚子鳥

(五〇) 伊勢のにしふく山、もりやま共に未勘

度倉元良の神祇百首引歌に「内宮のかたはらなる山陰に處むすびて侍りけるころ、こゝもまた都のたつみしかぞ住む山こそかはれ名は宇治の里」といふあり。同じ山歌

(五一) 西「梅に驚の鳴き侍りしに」心「梅に驚の聲かをりて聞え侍りしかば」

(五二) 夫木「家集驚を」

(五三) 西「旅宿の梅を」新松「旅宿梅を」心〇抄に「二人寝てこそ終雲あるべきを旅宿獨寝の移り霜と覺しきは梅がかにて有となり」

(五四) 〇抄に「昔の主、梅を植ゑ置きは心のなつかしきよと也。住みけむ人と云ひて題の古砌を示す。題詠の妙也」

(五五) 〇抄に「山里、簾ならで雨軒に垂るる自然の簾に籠るいと徒然也。是他に知られざる人家ぞと也。影のか字哉也」

(五六) 西「霞の中に歸る雁を」心「霞の中のかへる雁」

(五七) 夫木「二十」霞中歸雁といふ事を」

(五八) 西・心「歸雁を長樂寺にて」夫木五「家集歸雁を」